

松木藪遺跡採集の袋状口縁壺とその意義

本田道輝・河野裕次・恵島瑛子・嘉戸しおり・鎌田悠幹

I. はじめに

平成23年5月14日、本学考古学研究室の本田を引率者として、人文学科考古学専攻生を中心とするメンバーで日置市吹上町・南さつま市金峰町の遺跡見学会を実施した。その際、見学遺跡の一つ、松木藪遺跡において、道路法面に袋状口縁壺片が露出しているのを発見した。破片は不安定で道路に落下する可能性があったため、地元教育委員会に連絡し、後日教育委員会の方で取り上げ、保管されるに至った。

今回、教育委員会の協力により図化することができたため、以前に本田が南さつま市金峰町万之瀬川河床遺跡で採集した袋状口縁壺片と併せて図化し、ここに報告する次第である。

II. 松木藪遺跡の概要

松木藪遺跡は、南さつま市金峰町尾下にあり、金峰山の西麓から平野中央部へ細長く伸びる尾下台地の先端部近くに位置する（図1）。

周辺には高橋貝塚や阿多貝塚をはじめとして縄文時代や弥生時代の著名な遺跡が平野部を囲むように存在し、鹿児島県下でも有数の遺跡密集地域として知られている。遺跡周辺は、遺物の散布や工事等による土器の出土で古くから知られていたが、昭和53年の土取り工事によって溝状の遺構や南部九州で不明瞭であった弥生後期土器の存在が明らかとなり、注目されることとなった。遺跡の内容を探るため本田が中心となり昭和53年冬調査を開始し、これまでに6次にわたる発掘調査を実施（約270m²）している（本田1980、1981、1984、2005他）。

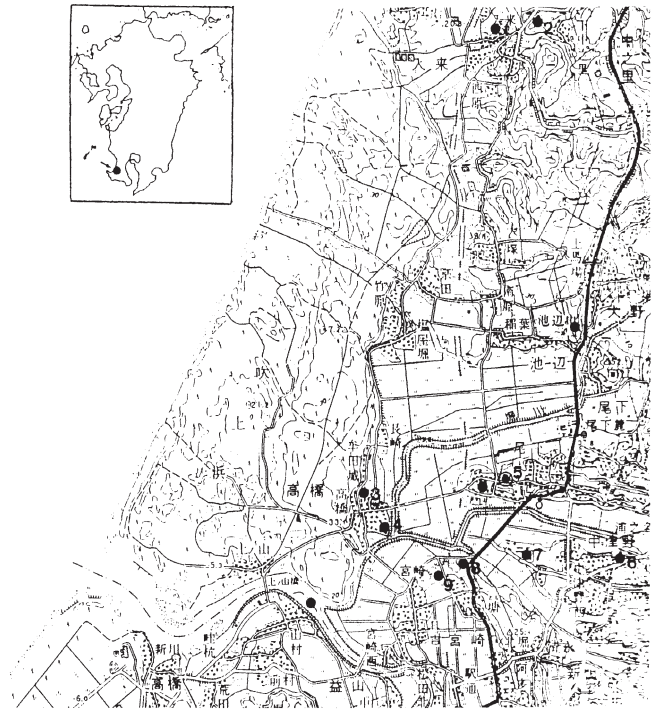


図1 松木藪遺跡と周辺の主要な弥生時代遺跡

1. 入来
2. 白寿
3. 下小路
4. 高橋貝塚
5. 松木藪
6. 中津野
7. 下原
8. 阿多貝塚
9. 下堀

この遺跡では南部九州地方最大規模の溝が確認されており、溝の中に1 m 程土砂が堆積した段階で弥生後期の遺物が大量に廃棄されている。弥生中期後半の竪穴住居跡の一部も確認されることから、弥生中期後半～後期にかなりの規模の集落があったと考えられる。

また、後期の一群の土器は、この遺跡で初めて器形や器種が明らかになったものであり、松木菌式土器（本田1980）と呼ばれている。松木菌式土器の主要器種の系譜は中部九州地方や大隅地方に求められ、北部九州地方や瀬戸内地方の土器がそれらに混じって出土することから、当時の交流や交易を考える上で貴重な資料となっている。遺構の規模や交流や交易を示す種々の遺物から、この遺跡は、当時地域の拠点集落として機能していたものと考えられる。

今回報告する袋状口縁壺は、大溝の検出地点から北側を下る道路の法面で発見した（図2）。なお、現地は雑草が生い茂っており、法面に遺構のプラン等は確認できなかった。

Ⅲ. 採集した袋状口縁壺について（図3）

松木菌遺跡（図3-1）

口縁部～頸部が残存している。頸部は付け根部分から一旦内傾し、緩やかに外反しながらラップ状に開き、袋部が丸みを帯びて内湾し、口唇部は丸くおさまられている。頸部の付け根には三角突帯が1条廻る。外面の調整は、横もしくは斜位のナデの後縦位のミガキが施されているが、ミガキは全面に施されておらず、部分的にナデ痕が残されている。内面はユビオサエ痕が全体的にみられ、袋部に横位のナデ痕も確認できる他、頸部にはシボリ痕が残されている。外面には赤色顔料が塗布されており、頸部の内面まで顔料の付着が確認できる。胎土は石英や角閃石、白色粒子を含み、精製されている。

万之瀬川河床遺跡（図3-2）

口縁部が残存しており、袋部は丸みを帯びて内湾し、口唇部は丸くおさまられている。口縁部と頸部との境に三角突帯が1条廻る。外面の調整は、横もしくは

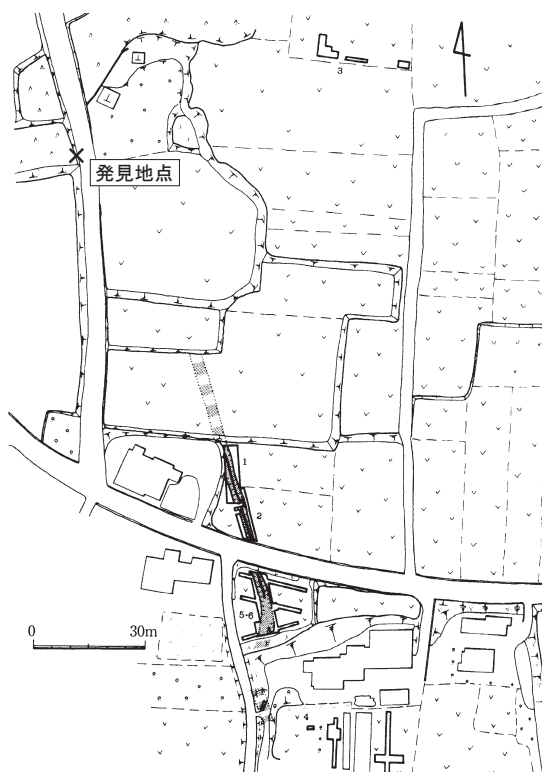


図2 袋状口縁壺発見地点

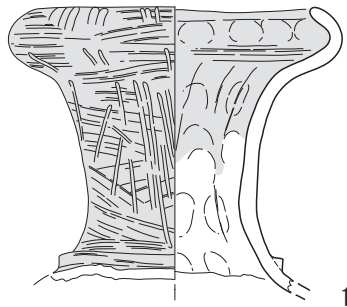


図3-1 松木菌遺跡

法量 (cm)	色調	調整	胎土	備考
(口径) 13.3 (残存高) 11.4	(外) Hue2.5YR4/6 赤褐(顔料) (内) Hue2.5YR8/3 浅黄	(外) ナデ(一、 \\) → ミガキ() (内) ユビオサエ、 ナデ(一)	1mm以下の石英、角 閃石、白色粒子を含 み精製されている	外面～頸部内面丹 塗り

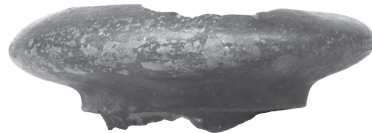
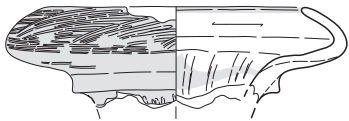


図3-2 万之瀬川河床遺跡

法量 (cm)	色調	調整	胎土	備考
(口径) 13.6 (残存高) 4.0	(外) Hue7.5YR5/3 にぶい褐 (内) Hue10YR7/3 にぶい黄橙	(外) ミガキ(一、 /、) (内) ユビオサエ → ナデ(一)	0.5mm以下の白色粒 子、透明粒子、光沢 を持つ鉱物を含み、 泥質	外面丹塗り



(S=1/3)

図3 採集した袋状口縁壺 (S=1/3)

斜位のミガキであり、わずかに残存する頸部には縦位のミガキが確認できる。内面はユビオサエ後に横位のナデが施されており、頸部にはシボリ痕が明瞭に残る。器面の摩滅が激しいものの、外面には赤色顔料の塗布が確認でき、内面にも顔料が付着している。胎土は白色粒子や透明粒子、光沢を帯びる鉱物が含まれており、きめ細かく泥質である。

IV. 南部九州出土の袋状口縁壺の集成と傾向—まとめにかえて—

さて、こうした袋状口縁壺は、南部九州においてどのような出土状況を示すのだろうか。今回、鹿児島県、宮崎県、熊本県南部（三太郎峠・人吉盆地以南）を対象地域として、袋状口縁壺の集成を行った^(注)ところ、本報告の松木菌遺跡、万之瀬川採集資料を含めた8遺跡14例を確認することができた(図4・5・表)。以下、いくつか特筆すべき点について述べていきたい。

松木藪遺跡大溝A出土資料(図5-8)は、在地の後期前半の土器(松木藪I・II式)と共伴して出土している(本田1980)。確認できた資料の中では唯一丹塗が施されないものであり、小型で、外面には荒いハケメ調整が全面に施されている。また、松木藪遺跡1号住居址出土の2点(図5-6・7)は別個体と考えられ、在地の中期後半の土器(山ノ口II式、黒髪II式)と供伴している(本田1984)。前畑遺跡の資料(図5-4)は、頸部から肩部にかけて分割暗文が施される点で他の事例と異なっている(鹿児島県教育委員会1990)。成川遺跡では、袋状口縁壺の他に、甕や広口壺、筒形器台といった須玖式の丹塗精製器種がまとめて出土している点特徴的である(鹿児島県教育委員会1983)。



図4 袋状口縁壺の出土遺跡分布図
(番号は表と対応)

表 袋状口縁壺集成表(宮崎、鹿児島、熊本県南部)

図4	遺跡名	所在地	図5	遺構・地点	共伴遺物	備考	文献
1	西片瀬原遺跡	宮崎県宮崎市佐土原町西片瀬原	1	採集		丹塗	田中 1974
2	古屋敷遺跡	宮崎県えびの市大字東北川字古屋敷	2	包含層		丹塗	えびの市教委 2005
3	西牟田遺跡	鹿児島県肝属郡東牟田町大字川西字西牟田	3	包含層		丹塗	東牟田町教委 1993
4	前畑遺跡	鹿児島県鹿屋市郷之原町	4	包含層		丹塗, 暗文	鹿児島県教委 1990
5	堂前遺跡	鹿児島県出水市高尾野町柴引		27号覆石墓		記述のみ	宮田 1992
				28号覆石墓		記述のみ	宮田 1992
				34号覆石土壇	弥生土器片(丹塗)土師器	記述のみ	宮田 1992
6	松木藪遺跡	鹿児島県南さつま市金峰町尾下松木藪	5	採集		丹塗	本稿(図3)
			6	1号住居址	山ノ口II式 黒髪II式	丹塗	本田 1984
			7	1号住居址	山ノ口II式 黒髪II式	丹塗	本田 1984
			8	大溝A	松木藪I式・II式		本田 1980
7	万之瀬川河床遺跡	鹿児島県南さつま市金峰町高橋上ノ山・加世田益山山村	9	採集		丹塗	本稿(図3)
8	成川遺跡	鹿児島県指宿市山川曲道	10	包含層		丹塗	文化庁 1973
			11	包含層		丹塗	鹿児島県教委 1983

また、西片瀬原遺跡と西牟田遺跡の例に関しては、田崎博之氏によって位置づけが検討されている（田崎 1998）。西片瀬原遺跡の資料（図5-1）は、工事中に中溝式の甕等と共に採集されたものであるが（田中 1974）、田崎氏は中部九州の罌式の模倣品であるとしている。そして西牟田遺跡包含層出土資料（東申良町教育委員会1993）（図5-3）についても、北部九州の高三瀨式古段階の模倣品であるとしている。

以上、全体的な傾向としては、出土数は少ないものの薩摩半島の西岸部や鹿児島湾湾口でやまとまって出土していることが分かる。また時間的な幅については、今回報告した2点も含め、北部九州の編年観では中期後半から後期初頭に位置づけられるが、遺構出土事例が少ないため、南部九州の在地土器との併行関係が不明確であるという問題点も残されている。

南部九州において、袋状口縁壺は出土数も少なく一般的な器種ではない。胎土の観察でも在地土器の胎土と比較すると異質なものを（万之瀬川河床遺跡事例など）がみられ、これらは在地製作品とは考えにくい。典型的な須玖式土器を製作する福岡平野や、その縁辺部である佐賀県、熊本県北部といった地域から搬入された可能性が考えられるが、今回採集した松木藪遺跡の資

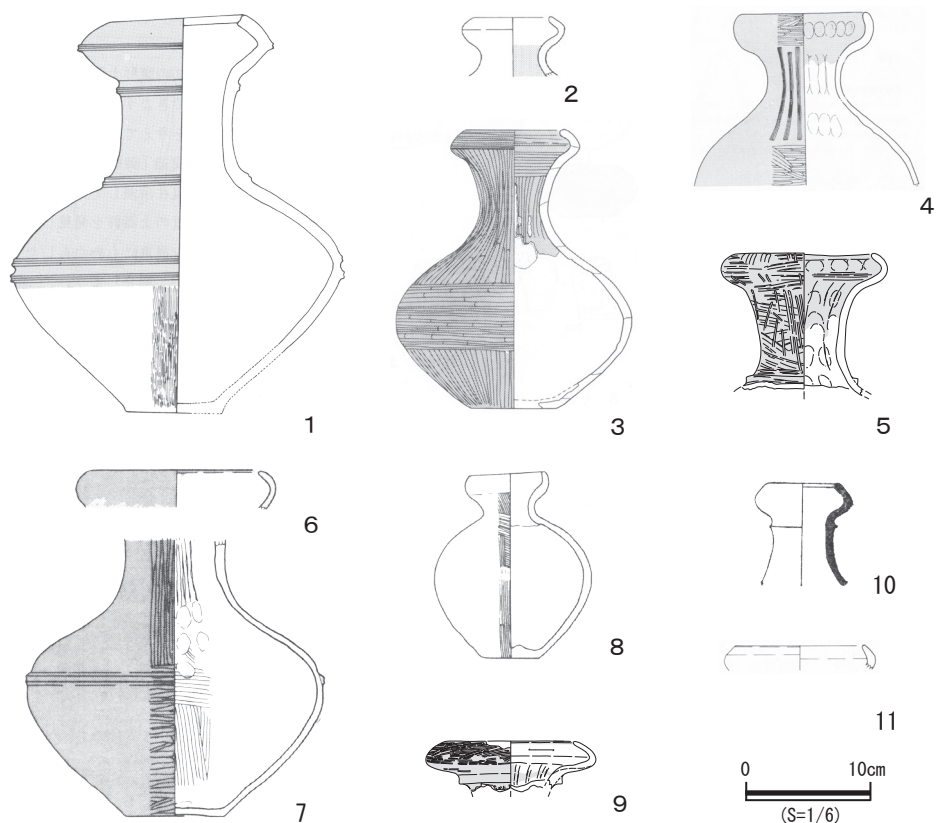


図5 南部九州の袋状口縁壺（S=1/6・番号は表に対応）

料も含め、南部九州の袋状口縁壺は器形がシャープさに欠けることや器壁が厚い等の特徴を有することから、後者の可能性が高いのではないだろうか。

今後の課題は、これらがどの地域から持ち込まれた土器であるのかを明らかにすることであり、理化学分析等を用いた製作地の検討も視野に入れておくべきであろう。

本稿はⅠを嘉戸、Ⅱを鎌田、Ⅲを河野、Ⅳを本田、河野、恵島が執筆し、本田と河野が協議の上全体を調整した。なお、今回報告した2点の実測・トレースは河野が担当した。

謝辞

最後になりましたが、発表の機会を与えて下さった南さつま市教育委員会及び福永裕暁氏に感謝申し上げます。

【注釈】

・集成は手元の報告書や県史・市町村史等で報告されている資料を対象とし、河野、恵島、嘉戸、鎌田が分担して行った。

【引用・参考文献】

- 田崎博之 1998「九州系の土器からみた凹線文系土器の時間位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書 研究代表者 下條信行
- 田中 茂 1974「宮崎県出土の丹彩袋状口縁壺形土器について」『研究紀要』第三輯 pp.45-54 宮崎県総合博物館
- 本田道輝 1980「松木蘭遺跡出土の土器について」『鹿児島考古』第14号 pp.112-123鹿児島県考古学会
- 1981「松木蘭遺跡の調査」『鹿大史学』第29号 pp.1-12 鹿児島大学法文学部
- 1984「松木蘭1号住居址出土土器とその系譜」『鹿大史学』第32号 pp.1-8 鹿児島大学法文学部
- 2005「松木蘭遺跡」『先史古代の鹿児島（資料編）』pp.228-230 鹿児島県教育委員会
- 宮田栄二 1992「鹿児島県内の主な古墳―地下式板石積石室― 61. 堂前遺跡」『鹿児島考古』第26号 pp.62-64 鹿児島県考古学会

【引用・参考報告書】

- えびの市教育委員会(編) 2005『東川北地区遺跡群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第41集
- 鹿児島県教育委員会(編) 1983『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
- 1990『前畑遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第52集
- 東申良町教育委員会(編) 1993『西牟田遺跡』東申良町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
- 文化庁(編) 1973『成川遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告 第七 吉川弘文館

追記

脱稿後、鹿屋市前畑遺跡の追加調査において袋状口縁壺が1点表採されていることを確認した(鹿児島県立埋蔵文化財センター2008)。この袋状口縁壺は、以前の発掘調査で出土したものの(本稿の図5-4)と同一個体の可能性があり、胎土分析でも「少なくとも同一の胎土を用いたと考えられる極近似値を得た」(同上、p.47)と報告されている。

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008『前畑遺跡Ⅱ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第133集